

詩人ナチュラリストの誕生：「マサチューセッツの自然史」を起点として

高橋，勤
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7159240>

出版情報：言語文化論究. 51, pp.31-43, 2023-11-10. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



詩人ナチュラリストの誕生

——「マサチューセッツの自然史」を起点として——

高 橋 勤

はじめに

「マサチューセッツの自然史」(“Natural History of Massachusetts”)は『ダイアル』(1842年7月号)誌上に発表されたソローの最初のエッセイである。編集者であるエマソンの依頼を受けて寄稿されたものだがソローのオリジナルではなく、マサチューセッツ州政府の野生生物「報告書」のレビューとして書かれたものである。またそうした経緯からしてもわが国ではほとんど研究の対象とならなかった作品である。

いっぽうこのエッセイは一篇のレビューもしくは自然史エッセイという枠組みをはるかに超えて、ソローの思想や科学をめぐる同時代性について多くの事実を語っているように思われる。極論すれば、このエッセイの刊行がその後の思想の展開と創作姿勢を大きく決定づけたように思われるのだ。ロバート・リチャードソン・ジュニアはその豊富な成果にふれ「その可能性を見抜いたのはエマソンの慧眼だった」と指摘するが(Richardson, Jr.119)、「マサチューセッツの自然史」をめぐる示唆されたソローの「可能性」とはどのようなものなのか。

またこれまでナチュラリストの進展をめぐるボストン周辺の時代背景についてほとんど言及されることがなかったように思われる。「マサチューセッツの自然史」の背景には、科学の進展をめぐるどのような同時代性が示唆されたのか。たとえばソローは19世紀当時の科学界とどのように関係し交流したのか。ソローというと孤独な探究者、在野の趣味人というイメージで捉えられがちだが、実際どのような研究仲間やライバルに囲まれ、どのようなネットワークのなかで動植物の知識を探究したのだろうか。またフィールドでの観察や採集の際にどのような文献を用いて種を同定し特徴を捉えようとしたのか。「マサチューセッツの自然史」をひとつの起点として、ナチュラリストをめぐるボストン周辺の時代背景について検証し、そうした影響の中でソローの思想と創作姿勢が形成された経緯について考えてみたい。

1 作品の成立

エマソンの紹介文

エッセイの冒頭には州政府が作成した「報告書」のタイトルとともに、そうした経緯を説明するエマソンの紹介文が付されている。

We were thinking how we might best celebrate the good deed which the State of Massachusetts has

done, in procuring the Scientific Survey of the Commonwealth, whose result is recorded in these volumes, when we found a near neighbor and friend of ours, dear also to the Muses, a native and an inhabitant of the town of Concord, who readily undertook to give us such comments as he had made on these books, and, better still, notes of his own conversation with nature in the woods and waters of this town. With all thankfulness we begged our friend to lay down the oar and fishing line, which none can handle better, and assume the pen, that Isaak Walton and White of Selborne might not want a successor, nor the fair meadows, to which we also have owed a home and the happiness of many years, their poet. (“Textual Notes” *Excursions* 397)

(マサチューセッツ州政府による科学調査の結果が最近書物として公表され、その偉業をなんとか讃えようとしていたところ、近所に住む友人——詩神にもつうじたコンコードで生まれで在住——がこうした著作へのコメントを快く引き受けてくれ、素晴らしいことに、この町の森や湖水で交わした自然との対話を記録してくれた。感謝とともに、わが友に乞うて見事な腕前のオールと釣竿の代わりにペンを執ってもらい、アイザック・ウォルトンやセルボーンのホワイトの後継者として、またわが故郷の幸せの源泉である美しき草原地帯を謳う詩人として、お願いしたのである。)¹

アイザック・ウォルトンは『釣魚大全』、ホワイトは『セルボーンの博物誌』の著者として有名な英国のナチュラリストである。エマソンは若きソローをそうしたナチュラリストに比すべき人物であり「詩人」として紹介した。郷土の若き才能を発掘しようとするエマソンの親心のようなものが感じられるが、この紹介文はさらに超絶主義者のサークルにおけるソローの特異な位置づけと、ソロー作品の将来的な方向性を示していたように思われる。超絶主義がエマソン流の観念論によって定義づけられるとすれば、ソローはむしろフィールドの知識に習熟した、いわば身体経験（悟性）に基づく知の可能性を提起する人物として期待されたのである。従来ソローをエマソンの弟子的人物として、その思想をエマソンの垂流とする見方が一般的であったが、その文学的キャリアの発端において、ソローは他の超絶主義者とは異なる独自の立ち位置を与えられていたのだ。そしてこの位置関係はソローの生涯において貫かれ、ソローはいわばナチュラルヒストリーを生きた人物として記憶されたのである。²

「マサチューセッツの自然史」は、タイトルにもかかわらず、その内容は体系的でも、また網羅的なものでもない。内容のおおくはコンコード周辺で観察される野生生物（掲載順に、鳥類、哺乳類、魚類、爬虫類、貝類）の生態と、それにまつわる風物誌である。もっとも多くの紙面が割かれたのは鳥類、哺乳類、魚類の記述であり、ソローの関心の所在がみてとれるのだが、たとえば鳥類については、観察される種のカタログではなく、季節のサイクルに応じて飛来する渡り鳥の種類とともに野山に響きあう鳴き声のコーラスが描かれている。アビの驚くべき潜水能力やミサゴの悠々とした帆船を思わせる飛翔なども描かれるが、湖でアビを追跡する描写はあきらかに『ウォールデン』の描写の原型となったと考えられる。

他方において、州政府の「報告書」のレビューとは名目だけで、具体的に言及されるのは結末部の以下の一節のみである。

The works we have placed at the head of our chapter, with as much license as the preacher selects his text, are such as imply more labor than enthusiasm. The State wanted complete catalogues of its

natural riches, with such additional facts merely as would be directly useful. The reports on Fishes, Reptiles, Insects, and Invertebrate Animals, however, indicate labor and research, and have a value independent of the object of the legislature. Those on Herbaceous Plants and Birds cannot be of much value, as long as Bigelow and Nuttall are accessible. They serve but to indicate, with more or less exactness, what species are found in the State. We detect several errors ourselves, and a more practised eye would no doubt expand the list. The Quadrupeds deserved a more final and instructive report than they have obtained. (NHM 27)³

(冒頭に掲げた報告書は、牧師が勝手気ままに説教のテキストを選ぶのと同じように、情熱よりも労力の産物というべきものだろう。州政府が欲したのは自然資源についての完全なカタログであり、利害に直接かかわる事実が付記されている。魚類、爬虫類、昆虫、軟体動物のレポートに関しては労力と調査の跡がみられ、州政府の目的を超えてそれ自体の価値を有している。植物と鳥類の報告についてはほとんど価値がなく、ビッグローやナタルの著作が参照できればそれで十分だ。州内で見つかる種類が記されているだけで、精確さにもばらつきがある。われわれにもいくつかの誤記が指摘できるし、専門家の目からみれば誤記のリストはもっと多くなるだろう。四つ足の哺乳類についてはかれらが収集したデータよりもさらに最終的で有効な報告書が必要である。)

牧師が勝手気ままにテキストを選んだというのはあきらかにエマソンへのあてこすりだろうが、この一節には「報告書」のコメントというかたちを借りて、ソロー自身の問題意識が明確に示されていた。調査委員会のリストに誤りがあり記述が不十分であることは別にしても、「報告書」が科学的好奇心に満たされた「情熱」(“enthusiasm”)の産物になっておらず、お役所仕事でしかないという指摘である。そのことは「数字」や微細な特長に記述が集中し、「一般読者にとっておもしろくない」(NHM 27)という指摘とも重なるだろう。

昆虫学者ハリス

じつをいうと、この報告書の執筆陣にはソローの恩師であり、卒業後も交流を続けた友人が含まれていた。昆虫の分類を担当したサディウス・ハリス(Thaddeus Harris)である。ハリスは当世昆虫分類学の第一人者でありハーヴァード大学図書館の司書でもあったが、ソローの在学4年次にナチュラルヒストリーの講義を担当したのがハリスであった(Walls, *Thoreau* 68)。さらにハリスは教え子とともにハーヴァード自然史愛好会を創設し、若きソローとともに自然観察にいそんでいたのである。いってみれば野外の観察学習において「情熱」を傾ける姿勢を身をもって示したのがハリス自身だったのだ。

ところが「報告書」の内容は昆虫のカタログに過ぎず、それも州政府委員会が望む「有益な」情報に偏っていた。すなわち「有害な昆虫」(“Insects Injurious to Vegetation”)の記述に偏っていたのである。むろん委員会の要請に応じたものだろうが、ソローはこうした有用性の議論に激しく反発した。むしろソローの視点は「小さな一枚の葉に目を据え虫の目線で周囲を見渡」すことであり、自然は「どの部分も生命に溢れている」(NHM 7) 事実を観察することだったのである。「生命に溢れ」た自然の経済において、いったい全体「害虫」など存在するのか。それを教えたのはハリス自身ではなかったか。ソローにしてみれば、昆虫学は人間存在を新たな方向へ「押し広げる」(NHM 7) ものだが、それは有益性や実用面を論じたものではなく、人間性の完成という超絶主義的な命題

に言及したものであった。報告書が「情熱よりも労力の産物」であったとはそうした意味合いだったのである。

余白の記述

「マサチューセッツの自然史」は前述のとおり体系的な記述をめざしたものではなく、むしろ断片的な余白性によって特徴づけられる。⁴ 野生生物の分類やリストからはみ出した周辺の事実や生態、風物誌にこそソローの「情熱」が傾けられたと言える。それは川の増水によって巣穴を追われハンターに狙われるジャコウネズミであったり、雪景色のなかのキツネの追跡や、早春の浅瀬で魚をヤスで突く漁の風物誌であったりした。たとえばページの余白にかかれた次のような注意書きにも、ナチュラリストとしての探求心や好奇心が明確に示されたと言えるのではないか。

A white robin and a white quail have occasionally been seen. It is mentioned in Audubon as remarkable that the nest of a robin should be found on the ground; but this bird seems to be less particular than most in the choice of a buildingspot. I have seen its nest placed under the thatched roof of a deserted barn, and in one instance, where the adjacent country was nearly destitute of trees, together with two of the phoebe, upon the end of a board in the loft of a sawmill, but a few feet from the saw, which vibrated several inches with the motion of the machinery. (NHM 8)

(白いロビンや白いウズラも時々見かける。オーデュボンの中にロビンの巣が地上でみられるのは驚くべきことだという記述があるが、実際この鳥は巣の場所選びにはあまりこだわりのない。わたくしは放置された納屋の藁葺き屋根の下に巣があるのを発見したことがあるし、一例では周囲に木立がなく製材所の板きれの端にフィードのふたつの巣とともにあるのを見出した。そこは回転する鋸からほんの数フィートしか離れておらず、機械の振動でガタガタと数インチ揺れる場所だったのである。)

むしろソローがこのエッセイを構成するうえで目指したのは、たんなる分類やカタログではなく、一般読者が興味をそえられるような自然の事実と生態、さらに詩的な表現に昇華する文学的感性であった。ここで触れられたオーデュボンとの比較でいえば、死んだ標本をもとにその稀有な画才によって生命感溢れる野鳥のスケッチを作成したオーデュボンにたいして、ソローは野生生物の生きた生態そのものを言葉のスケッチによって克明に描き出したのである。それは体系性よりも断片的な記述によって、むしろその余白性によって特徴づけられたと言える。「新たな自然の事実を知ることとはなんと楽しい(“How sweet”) ことだろうか。まだまだヴェールにつつまれた世界があるということだ」(PJ4: 471)、ソローがそう日記に記すのは1851年だが、こうした姿勢はソローの自然体験に貫かれた視点であったのである。

ソローは『ウォールデン』において「人生の広い余白を愛する」(W 111) と語っているが、ナチュラリズムについても同様のことが言える。当時主流であった体系的な方法論ではなく、むしろそうした手法からはみだした、そうした手法では捉えきれない自然の事実を補足的に描き、記述の余白性のなかにもっとも本質的な事実が潜んでいることを直感したと思われるのだ。ソローが愛した「人生の広い余白」とは、むしろ「本質的な事実だけに直面する」(W 90) という根幹的な主張と連動していた。

2 科学への戸惑い

科学の台頭

さてソローにおける自然観察や野生生物への関心は孤独な趣味としての活動ではなかった。ソローのナチュラルヒストリーへの傾倒は19世紀中葉におけるボストン周辺の科学への関心の高まりと密接に関連していたのである。ここで注目したいのは、19世紀において自然科学の考え方が大きく変容した事実である。18世紀後半に進展したナチュラルヒストリーは、19世紀に入るとより専門化された科学分野へと細分化され、分野に応じた特定の方法論が確立されていく (Richardson, Jr. 363)。さらに1859年にはダーウィン (Charles Darwin) の『種の起源』(*On the Origin of Species*) が刊行され、自然選択説によって自然科学への見方が大きく変革される。またヘッケルによってエコロジーという概念が創出されるのは1866年だが、ソローのナチュラルヒストリーへの関心はそうした同時代性のなかで創出され発展したものであったのである。『ウォールデン』というテキスト(とくに冒頭「経済」の章など)が19世紀中葉における合衆国東部における資本主義経済の浸透と暮らしの変容を直接的に反映したものだとしたら、ソローの自然史エッセイは自然科学にたいする見方と方法論の変容を的確に反映したテキストであったと言える。

合衆国における自然科学の進展を如実に示すのがハーヴァード大学の陣容の拡充でありカリキュラムの創出であった。ソローがハーヴァードに在学するのは1834年から37年である。ソローが在学中にハリスのナチュラルヒストリーの講義に出席し自然史愛好会で活動したことは前述したとおりだが、そのほぼ同じころ植物学の権威であるエイサ・グレイ (Asa Gray) がミシガンからハーヴァードに移籍し教鞭を執り始めている。グレイは英国のチャールズ・ダーウィンとも交流があり、進化論の形成を後押しした人物であった。ソローはグレイをとおして刊行されたばかりの『種の起源』を読んでいたのである (Walls, *Thoreau* 458)。

また46年にはスイス人の動物学者ルイ・アガシ (Louis Agassiz) が講演旅行でボストンを訪れ、47年にハーヴァードの教授に就任する。早速ソローはアガシのもとにコンコード川の魚の標本を届けるが、アガシの『アメリカの自然史』第1巻が刊行された1857年にはエマソン家で昼食を共にしている (Richardson, Jr. 367)。ソローがハーヴァードの自然史分野における試験官を委嘱されたのはその二年後のことだった。いわばソローは自然史の世界的権威と交流し、情報を交換していたのである。ソローの自然史への傾斜はこうしたネットワークのなかで育まれたと考えられる。

ボストンには少なくとももう箇所ソローの博物学的関心を高めた場所が存在した。ボストン自然史協会である。現在の科学博物館の前身だが、ボストン自然史協会が創設されたのは1830年であった。ソローが寄贈したオオタカの標本がアメリカの固有種であることが判明したこともあり、ソローはその後客員研究員に推挙されている。自然史協会としても在野の観察家から貴重な標本や情報が届けられることを望んだものであろうし、ソローとしても自然史協会の標本や資料を無料で参照できることは何よりも有難かった。ソローにとってハーヴァードと自然史協会がボストンにおける自然史をめぐる拠点となっていたのである (Walls, *Thoreau* 307)。

1852年2月6日、ハーヴァードを訪れたソローは図書館の司書を務めるハリスとの立ち話をこう日記に綴っている。

The artificial system has been very properly called the dictionary—and the natural method, the grammar of the science of botany, by botanists themselves—But are we to have nothing but grammars

and dictionaries in this literature? Are there no works written in the language of the flowers? I asked a learned & accurate naturalist who is at the same time the courteous guardian of a public library to direct me to those works which contained the more particular—*popular*—account or *biography* of particular flowers from which the botanists I had met with appeared to draw sparingly—for I trusted that each flower had had many lovers & faithful describers in past times—but he informed me that I had read all—that no one was acquainted with them—they were only catalogued like his books. (PJ4: 330)

(植物学者によってそうした人為システムは辞書とよばれ、自然メソッドは植物学の文法と言われる。しかしこうした文献においてわれわれは辞書と文法しかもちえないのか。たとえば花の言語で書かれた作品というのではないのか。学識のある精確なナチュラリストで公立図書館の礼儀正しい司書でもある人物に、一つひとつの花の伝記、よく知られた個々の記述は存在しないかと尋ねてみた。私の知る植物学者はほとんど言及しないが、過去には多くの愛好家や著述家が愛した花というものはあるからだ。かれの話では、そんな本はだれも知らないし、僕が読んでいない本もないということだった。かれの本のようにみんなカタログを作成していると。)

この日記の記述は、ソローの自然科学にたいするアンビバレンスを的確に指摘している。なぜなら自然科学における方法論 (taxonomy)、すなわち分類やカタログ形成という「辞書」や「文法」にたいする懐疑が示されたからである。この科学的手法にたいする傾倒と反発が、ソローのナチュラリストにたいする態度を特徴づけたように思われるのである。

花の伝記

そのアンビバレンスを象徴的に物語るのが、ソローのリンネの方法論にたいする考え方である。「マサチューセッツの自然史」においても、ソローのリンネにたいする見方は称賛と懐疑に分裂している。ソローはラップランドの冒険の装備を確認するリンネをナポレオンの行軍に喩え、「科学とはつねに勇敢である」(NHM 6) とその探求の姿勢を称賛する。ソローはまた自ら採集した植物をリンネの二分法——ラテン語の属と科による命名法——を用いて分類し同定しており、そうした学術語の利便性について、「植物の葉やその他の部分を表す植物学の言葉はなんと豊富で精確なことだろう。用語の精確さを知るだけでも植物学——学術語やシステムの価値——を学ぶ価値はある」と語っている (PJ3: 382)。

他方において、ソローは分類学や体系的なカタログの作成に飽き足りないものを感じていた。ハーヴァード図書館でのハリスとの会話が示すように、ソローは科学者の記したカタログではなく一般の愛好家が記した草花の「伝記」を探し求めているからだ。ソローはリンネに言及しつつ、こう振り返るのだ。

But after all, where is the flower lore? —for the first book & not the last should contain the poetry of flowers— The natural system may tell us the value of a plant in medicine or the arts or for food—but neither it nor the Linnaean to any great extent tell us its chief value & significance to man—which in any measure accounts for its beauty,—its flower-like properties,—, ... Not about what children & all flower-lovers gather flowers for—.... Not how good they are to wear on the bosom— or to smell— how much they are to the eye & the sentiments—not how much to the palate and the sensations—

flowers as flowers. (PJ4: 306)

(つまるところ花の物語というのはどこにあるのだろう。最後ではなく、まず最初に手に取る本には草花の詩が書かれてなくてはいけないと思うのだ。自然システムには医療、工芸、食物について植物の価値が書かれているかもしれないが、そうした事実やリンネの手法は人間にとっての一義的な価値や意味を語らず、その美しさや花らしい性質にはまったく触れられていないのだ。(中略) たとえば子どもたちや花を愛する人がなぜ花を摘むのか。その花が胸に飾られていい匂いがし、目や感情に訴えかけ絵の具のパレットや感覚に投影される、そうした花としての花については、ほぼまったく記述がない。)

ソローが「マサチューセッツの自然史」において目指したのは「花としての花」、いわば野生の動植物の「伝記」であったと言える。

超絶主義者

1853年3月ソローのもとにアメリカ科学振興協会からアンケート調査の依頼が届いている。ソローは科学の関心領域について回答した後、次のような断想を綴っている。

I felt that it would be to make myself the laughing stock of the scientific community—to describe or attempt to them that branch of science which specially interests me—in as much as they do not believe in a science with deals with the higher law... The fact is I am a mystic—a transcendentalist—& a natural philosopher to boot. Now I think—of it—I should have told them at once that I was a transcendentalist (PJ5: 469-70)

(私のおもな関心領域がなにか述べたところで、科学界の笑いものにされるだろうと感じた。なぜならかれらはより高い法則に関連した科学など信じていないからだ。(中略) 結論からいうと、私は神秘主義者であり超絶主義者、自然哲学者なのだ。そのことを考えると、最初から超絶主義者と書いておくべきだった。)

「超絶主義」という言葉は当時のアメリカ社会において、「抽象的」「わけが分からない」と否定的にみられた事実からしても、そこに自嘲の意味が込められたことは想像に難くない。しかしより本質的な問題として、ソローのなかで科学界、その科学的手法への懐疑と違和感が示されたと思われる。ソローが追究した真理とは科学的手法の枠組みにおいて見いだされた事実ではなく、むしろその背後にある法則であり、そうした事実から類推される精神的事実であったからである。先述した植物学の用語について述べた日記のなかで、ソローは同様に精確な心理学的事実を記述する用語があるだろうかと推論する (PJ3: 382)。自然の事実と人間精神が対応し、つねにその象徴的な類縁性、すなわち「より高い法則」において自然が解釈されたとすれば、たしかにそれは超絶主義的だと言える。

ソローにはまた個々の事実から普遍的な自然の原理を見出そうとする傾向があるのも事実である。もっともよく知られた例が『ウォールデン』「春」の章に描かれたディープカットの雪解けのシーンである。流出した切通の土砂の模様に植物の構造ばかりか、人体の内臓の生成を連想するのだが、ソローがそこに見出したものは自然の「プロトタイプ」であり「イデア」であり「法則」であった。同様に「マサチューセッツの自然史」では植物と霜の形状に共通性を見出し、「結晶の植物学」という観点から宇宙の形状の根源的な統一性を類推する。

This foliate structure is common to the coral and the plumage of birds, and to how large a part of animate and inanimate nature. The same independence of law on matter is observable in many other instances, as in the natural rhymes, when some animal form, color, or odor has its counterpart in some vegetable. As, indeed, all rhymes imply an eternal melody, independent of any particular sense. (NHM 24-25)

(この葉状の構造はサンゴや鳥類の羽根にも共通し、いや生物、無生物を問わず大部分の生物に共通したものである。この物質にたいする法則の独立という事実は、自然の韻律のように、そのほか多くの事例にもみられ、動物の形態や色、あるいは臭気に至るまで植物に対応するものが存在する。じっさい一つひとつの韻律は永遠のメロディを暗示し、固有の意味から独立している。)

こうした考察に照らしてみると、ソローは自然のなかに普遍的な事実を追求した、というエマソンの指摘は的確であったように思われる (Emerson 442)。

その一方で、超絶主義者のサークルにおけるソローの異色さは自然の一つひとつの事実がすぐさま普遍的な法則に収れんすることなく、その絶対的な単一の意味、その観念論的な世界観のなかへと還元されない点にある。ソローは1851年12月25日の日記に、「ああ純粋な心、純粋な思想を与えてほしい。普遍的な法則を見出そうと急がないことだ。一つひとつの事例をもっと明確に見るようにしたい」(PJ4: 223) と綴っている。ソローの関心として普遍法則や精神的事実の類推、すなわち「より高い法則」を見出す傾向があったことは否めないが、超絶主義者としてのソローの特性はその鋭敏な身体感覚によって自然の個々の事実を「情熱」を傾けて経験し、追求し、そして共感した、そうした姿勢にあったと思われる。

3 真実に花開く事実

新たなネイチャーライティング

さて、これまでの議論をここで整理しておこう。「マサチューセッツの自然史」においてソローが目指した自然の記述は、当時科学界において主流であった分類や体系的なカタログではなく、野生生物の生態であり人間生活に溶け込んだ風物と物語性であった。いわば死んだ標本に基づく事実の羅列ではなく、自然の生きた生態をありのままに、みずみずしい感覚と文学的感性をとおして描き出したと言える。日記の抜粋から構成された断片性は否めないにしても、それは従来の自然描写とは異なる、ソローによって完成された新たな文学ジャンル、ネイチャーライティングの創出であったのである (Meltzer and Harding 212)。ソローの友人エラリー・チャニングの言葉を借りれば、「詩人ナチュラリスト」の誕生の瞬間だったのである。こうした自然描写は、代表作『ウォールデン』において野生生物の描写ばかりか、湖周辺の風景描写、そして冬の景色と風物誌等にかき入れられることになる。

「マサチューセッツの自然史」は野生動物の生態の記録だが、その冒頭と結末部には自然科学をめぐる思想の断片が組み込まれている。冒頭部ではソローは自然の本質を「健康」と定義し、科学は「勇敢」であり、ナチュラリスティックは「秘薬のようなもの」(NHM 5) という記述がある。また結末部では「真の科学者」についての断想が記されている。「真の科学者」とは方法論によらず、自然との「直接的な交流と共感」をとおして事実を探究し、「インディアンの知恵」を追究する者であ

る (NHM 28) という指摘である。こうしたふたつの断想について考察を深めてみよう。

まず確認しておきたいのは、ローラ・ウォールズの指摘にあるように (Walls, *Seeing New Worlds* 6)、19世紀の中葉において科学はいまだ細分化されておらず、「科学」「科学者」という言葉は、おおくの場合、哲学者や詩人と同義として用いられた事実である。すなわちいずれも真理探究の手段であり、自然哲学の文脈において解釈されたのである。ソローが「真の科学者」、「勇敢な科学」、「臆病さは非科学的である」(NHM 6) と言う場合、その「科学」とは現代的な意味における物理科学を指すものではなく、むしろ哲学的な探究を意味していたと考えていいだろう。そうすると自然という「健康の源泉」に分け入って探求をつづける「勇敢な」科学も、「インディアン」の知恵を身につけた「科学者」もそれほど遠く隔たっていないことが了解される。科学とは自然の事実を追究する手段であり、人間存在の可能性を新たに広げてくれるものだからだ。

自然の事実

ソローのナチュラリストへの関心は自然の事実をどう解釈し、どう表現するかという問題に集約されるのだが、ソローの科学的手法にたいするジレンマは、「マサチューセッツの自然史」の結末部でも表明されている。州政府委員会の「報告書」の記述が不十分であり、科学的探求がいまだ黎明期にあることを認めたくて、ソローは「事実の価値を過小評価しないようにしたい」と語っているからだ。ソローの日記に「事実」という項目が書き記されるのは最初期の1837年のことだが、そこに記された「真実に花開く事実」(PJ1: 19) という一節がここに挿入されている。

But the ground was comparatively unbroken, and we will not complain of the pioneer, if he raises no flowers with his first crop. Let us not underrate the value of a fact; it will one day flower in a truth. (NHM 27)

(この分野はまだ比較的未開拓の領域である。パイオニアが最初の収穫で花を咲かせなかったとしても、われわれは不平を言うまい。事実の価値を過小評価しないようにしたい。いつの日か真実に花開くこともある。)

ここでは科学的探求の必要性とともに、科学的事実とは異なる「真実」の追究が示唆されている。それを自然の事実に対応する普遍的な法則、すなわち「より高い法則」の探求という超絶主義的な意味合いで捉えることも可能であろう。しかしむしろ注目したいのは、「花開く」という述語である。なぜならソローはこの一節によって「真実」の探究とともに、自らの創作姿勢を示したように思われるからだ。科学的事実を「花のような」言葉で語ること、いや科学的にかならずしも「真実」でなかったとしても、より深い心理的洞察をふくむ「詩的真実」として表現することを願ったのではなかったか。ソローは科学的手法の限界に関してさらにこう続けている。「われわれは類推や演繹から学ぶのではなく…直接的な交渉や共感から学ぶのだ。手法や方法論によって真実を知ることは不可能であり、ベーコン主義者にしても他と同様の間違いを犯している」(NHM 28)。科学の理論や方法論が自然の事実の一面をのみを捉えたものであるとするなら、そうした科学的事実や論理性を特権化する必要はない。

科学と想像力

同様の文脈で、ソローは「真の科学者」について述懐する。「真の科学者というのはよりしなやか

な性質によって自然をよりよく知ろうとする者である。かれは他よりうまく匂いをかぎ、味わい、見て、聴いて、触ろうとする。かれはより深くよりしなやかに経験する」(NHM 28)。「真の科学者」とは特定の理論や方法論ではなく、自然との「直接的な交渉や共感から学」び「より完璧なインディアンの知恵」を身につけた者たちである、と。

ソローが理想とした科学者もしくは自然にたいする探究心は、かならずしも科学的事実固執するものではなかった。たとえば1851年12月25日の日記で雲の形状や美しさについて論じながら、「きみはぼくの悟性にたいして科学的に説明するが、想像力にたいしては何も説明しない。ぼくが大切にしたいのはその美しさが示唆する象徴である。科学の手法によってその象徴性を取り去ったならば、ぼくにとってはなんの意味もないし何も説明しない」と語っている (PJ4: 221-22)。

さらに、その一か月前の日記ではこうも綴っている。

I too would fain set down something beside facts. Facts should only be as the frame to my pictures— They should be material to the mythology which I am writing;.... My facts shall be falsehoods to the common sense. I would so state facts that they shall be significant shall be myths or mythologic. Facts which the mind perceived— thoughts which the body thought with these I deal. (PJ4: 170)

(ぼくは事実以外のなにかを書き記したいと考えている。事実は絵のフレームのようなもので、ぼくが書いている神話の素材に過ぎない。(中略) ぼく自身の事実は常識に照らして言えば誤りかもしれない。事実を意味あるものとして、神話や伝説のように書きたいと思うからだ。精神が捉えた事実、身体が考えた思想、それを書こうと思う。)

4 「マサチューセッツの自然史」から「ウォーキング」へ

勇敢な科学

「マサチューセッツの自然史」に貫かれている思想は自然が生命に溢れた世界であるという事実である。それは昆虫学の目線でみた世界が「生命に溢れている」という記述にもつながるのだが、他方においてそれはソローにおける19世紀社会にたいする欠乏の認識と密接に関連していたように思われる。すなわち「社会というのはつねに病んでいる」(NHM 4) という認識である。「社会において健康を見出すことはでき」ず (NHM 4)、「政治的組織の一員として考えれば、人間は墮落している」(NHM 4) という指摘である。

むろんここに都市と田園、文明と自然、経験と無垢、というロマン派特有の二項対立的な言説を見出すこともできる。自然状態においてこそ人間は最も健全であり、調和した存在であるという主張である。さらにこうした言説の背後に結核というソロー自身の病を読み取ることも可能だろう。自然は「健康の源泉」(NHM 5) であり、その探求は「勇敢な」行動にほかならず、ナチュラルヒストリーは不老長寿の「秘薬のようなもの」であるという訳だ。ソローが英国のロマン派詩人ワーズワスを愛読したことは事実であり、その田園主義にしても、また子供時代の記憶をとおした精神的危機(病)からの回復にしても、両者に共通した構図であったと考えることもできる。

他方において、ソローが「科学とはつねに勇敢」であり、その「不屈の勇敢さ」は兵士の勇気にも劣らないと主張するとき、ソローの自然体験が受動的な癒しの経験でも、心の平静と調和をもとめた田園主義でもないことが理解される。それはむしろ使命的と言えるほど果敢で積極的な探究であり、生命を賭した冒険であったとさえ言えるだろう。ソローはエマソンら周囲の者たちからしば

しば「勇敢なソロー」とよばれたのだが、その代名詞とされた「勇敢さ」はソローの思想の根幹をなすものではなかったか。それは「私は失意の賦など書きたくはない」という『ウォールデン』のエピグラフにも、また「冒険を求めよ。…おのが性質のままに野生的であれ」(W 207) という主張にも密接に関係したと思われるのだ。人生を探求の旅と捉え、その真理追究のひとつのモデルとして「科学者」であるということ。ウォールズが指摘するように、「科学者」が詩人や哲学者とほぼ同義であったとはそうしたことを意味するのだと思われる。

野生の活力

さらに自然の「健康」が、エッセイ「ウォーキング」に結実するソローの野生論と密接に関連した事実にも注目する必要がある。「おのが性質のままに野生的であれ」とは内なる野生の回復を意味するものだろうが、ソローにおいて「野生」(the wild) は「活力」(vigor) 「健康」(health) とほぼ同義として用いられていた。「マサチューセッツの自然史」において自然は「健康の源泉」と描かれ、「リフレッシュ」(“refresh”)あるいは「回復する」(“restore”, “restorative”) 効能と密接に結びつけられていたのである。

ソローはまた「ウォーキング」において西部のウィルダネスの文化的可能性を示唆しているが、同様の内容がすでに「マサチューセッツの自然史」のなかに示唆されていたのである。

What is transpiring from summer to winter in the Carolinas, and the Great Pine Forest, and the Valley of the Mohawk?... The spruce, the hemlock, and the pine will not countenance despair. Methinks some creeds in vestries and churches do forget the hunter wrapped in furs by the Great Slave Lake, and that the Esquimaux sledges are drawn by dogs, and in the twilight of the northern night, the hunter does not give over to follow the seal and walrus on the ice. (NHM 4-5)

(カロライナで、グレート・パイン・フォレストで、さらにモホークの渓谷で、夏から冬にかけていったいなにが生起しているだろうか。(中略) ツガ、ヘムロック、マツはけっして絶望しない。教会や日曜学校で語られる説教は、グレート・スレーブ湖のほとりで狩りをする毛皮に身をくるんだハンターのことはまったく想定しておらず、エスキモーの犬橇が引かれ、極北の夜の薄明かりの下ハンターは氷上のアザラシやセイウチの追跡をけっしてあきらめることはない。)

ここに示されたのは、自然の「野生」的な健全さが人間精神をリフレッシュし「回復する」という図式である。人間存在が文明社会において「墮落」し「病的」な状況にあるとすれば、人間性を解放し救出するのは「野生的」な自然でなければならなかった。それは「野生にこそわれわれを保存する力がある」(Wal 202) という「ウォーキング」の主張にも、また「われわれはときに野生の強壯剤を必要とする」(W 317) という『ウォールデン』の主張にも連なるものだったのである。

注

- 1 本論文における原著からの日本語訳はすべて拙訳とした。
- 2 本論文の表題「詩人ナチュラリスト」は詩人エラリー・チャニングによるソロー伝のタイトルからとったものだが、ソローは周囲の友人からナチュラリストとして記憶されていた。エマソンの弔辞「ソロー」においても、その記述の大半はソローのナチュラリストとしての資質と

技量についてのものだった。Ralph Waldo Emerson, “Thoreau,” *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*. Vol. 10. Ed. Edward W. Emerson. pp. 419-452.

- 3 ソローの作品からの引用について、『ウォールデン』は *W*、「マサチューセッツの自然史」は *NHM*、「ウォーキング」は *Wal*、プリンストン版日記については *PJ* と略記し、それぞれ巻数とページ数を記した。
- 4 エッセイの構成に関して特徴的なのは、そのコラージュ的手法である。一見「報告書」のレビューとして即興的に書かれた印象を受けるが、実際はほぼ全編をとおして『日記』からの抜粋によって構成されたものだった。すなわちソローが日記を書き始めた1837年から41年暮れまでの記述を断片的に貼り合わせて構成された文章だったのである。それは執筆活動というより編集作業とよばれるに相応しいプロセスだったのである。
- 5 ダーウィンとグレイが手紙による交信を始めたのは1855年であり、『種の起源』刊行の2年前、1857年にはグレイは進化論の内容を知らされていた。アメリカの学会において進化論を積極的に擁護し進展させたのもグレイだったのである。

Works Cited

- Emerson, Ralph Waldo. “Thoreau.” *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson: Lectures and Biographical Sketches*. Vol. 10. Ed. Edward W. Emerson. pp. 419-452.
- Foster, David R. *Thoreau’s Country: Journey Through a Transformed Landscape*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1999.
- Harding, Walter. *The Days of Henry Thoreau*. 1962; New York: Dover, 1965.
- Meltzer, Milton, and Walter Harding, *The Thoreau Profile*. New York: Thomas Y. Crowell Company, 1962.
- Richardson, Robert, Jr. *Henry David Thoreau*. Berkeley: The University of California Press, 1986.
- Thoreau, Henry David. *Walden*. Princeton: Princeton University Press, 1971.
- . “Natural History of Massachusetts.” *Excursions*. Ed. Joseph J. Moldenhauer. Princeton: Princeton University Press, 2007. pp. 3-28.
- . “Walking.” *Excursions*. Ed. Joseph J. Moldenhauer. Princeton: Princeton University Press, 2007. pp. 185-222.
- . *Journal 1: 1837-1844*. Ed. Elizabeth Hall Witherell et al. Princeton: Princeton University Press, 1981.
- . *Journal 2: 1842-1848*. Ed. Robert Sattelmeyer. Princeton: Princeton University Press, 1984.
- . *Journal 4: 1851-1852*. Ed. Leonard N. Neufeldt and Nancy Craig Simmons. Princeton: Princeton University Press, 1992.
- . *Journal 5: 1852-1853*. Ed. Patrick F. O’connell. Princeton: Princeton University Press, 1997.
- Walls, Laura Dassaw. *Henry David Thoreau: A Life*. The University of Chicago Press, 2017.
- . *Seeing New Worlds: Henry David Thoreau and Nineteenth-Century Natural Science*. Madison: The University of Wisconsin Press, 1995.

The Birth of a “Poet-naturalist”:

Thoreau’s “Natural History of Massachusetts”

Tsutomu TAKAHASHI

Thoreau’s “Natural History of Massachusetts” was published on the July issue of *The Dial* in 1842. The essay, Thoreau’s first published work, was intended as a review of *Reports—on the Fishes, Reptiles, and birds; the herbaceous Plants and Quadrupeds; the Insects Injurious to Vegetation; and the Invertebrate Animals of Massachusetts*, published by the Commissioners on the Zoological and Botanical Survey of the State. Despite its original purpose, however, the essay, culled mostly from Thoreau’s journal entries in 1837 through 1841, develops into a uniquely original rendition of natural history, aided by the poet’s views and insights on the status of science and transcendental philosophy. The present study considers some major factors constituting the characteristic features of Thoreau’s nature writing and also investigates his associated network of friends and scientists around Boston who shared a strong interest in the emergent discipline of natural history.

This study is particularly focused on Thoreau’s criticism, more precisely, his skeptical sense of ambivalence toward the way that scientific facts are formulated and documented. Apparently disappointed in the mere listing of biological facts in the *Reports* and dismissing the best part of them as results of “more labor than enthusiasm” and “not interesting to the general reader,” Thoreau more fundamentally questions the validity of scientific vocabulary and method, typically represented by Linnaean system of classification, as a truthful and vividly living rendition of nature. While sufficiently aware of the importance of exploring natural facts (“Let us not underrate the value of a fact; it will one day flower in a truth”), Thoreau underscores the need to incorporate details of cultural history and myth and thus brings in his description a vision of the moment when a scientific fact does “flower” in a poetic truth.